

*松本伊智朗（まつもと いちろう）

- ①北海道大学大学院教育学研究院（教育福祉論、貧困研究）
- ②『生まれ、育つ基盤—子どもの貧困と家族・社会（シリーズ子どもの貧困①）』（共編著）明石書店、2019年
『子どもの貧困』を問いなおす—家族・ジェンダーの視点から』（編）法律文化社、2017年
『子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために』（共編著）明石書店、2008年
- ③ウクライナでの戦争が続いている。地球上のどこかで常に戦争があることを、改めて突きつけられる。戦争は貧困を生み、貧困は戦争を生む。貧困研究はどのように平和の構築に貢献できるのか。無力感がつのるが、あきらめるわけにもいかない。

鳥山まどか（とりやま まどか）

- ①北海道大学大学院教育学研究院（教育福祉論）
- ②「世帯のなかに隠れた貧困—女性の貧困をいかに捉えるか」『大原社会問題研究所雑誌』739号、2020年
『教える・学ぶ—教育に何ができるか（シリーズ子どもの貧困③）』（共編著）明石書店、2019年
「子育て世帯の家計—滞納・借金問題から考える」松本伊智朗編著『子どもの貧困』を問いなおす—家族・ジェンダーの視点から』法律文化社、2017年
- ③さまざまな工夫や努力をしなければ生活が成り立たない、がんばってやりくりしても支払いが追いつかない、という社会そのもののおかしさを議論の俎上にのせたい。以前、このように書いたことがある。この思いは変わっていない。

関あゆみ（せき あゆみ）

- ①北海道大学大学院教育学研究院（小児神経学、特別支援教育）
- ②『T式ひらがな音読支援の理論と実践—ディスレクシアから読みの苦手な子まで』（共著）中山書店、2022年
『LDの脳機能』『児童青年精神医学とその近接領域』58巻2号、2017年
『高等学校における特別支援教育の現状と課題(1)—北海道内の高等学校における実態調査から』（共著）『子ども発達臨床研究』9号、2017年
- ③障害のある子どもの医療や教育に関わってきました。子どもの可能性が家族の経済状態で左右されることのない社会であって欲しい、と思います。

川田 学 (かわた まなぶ)

- ①北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター（発達心理学，保育学）
- ②『保育の発達論のはじまり—個人を尊重しつつ，「つながり」を育むいとなみへ』ひとなる書房，2019年
『遊び・育ち・経験—子どもの世界を守る（シリーズ子どもの貧困②）』（共編著）明石書店，2019年
『乳児期における自己発達の原基的機制—客体的自己の起源と三項関係の蝶番効果』ナカニシヤ出版，2014年
- ③子どもの貧困に関わる研究に携わって日が浅いですが，乳幼児期への着眼が比較的手薄であるように思われ，乳幼児や保育の研究者の果たすべき役割が多く残されていると感じています。

大澤真平 (おおさわ しんぺい)

- ①札幌学院大学人文学部（子ども・若者の貧困問題，児童福祉論）
- ②「子どもの貧困の経験という視点」『教育福祉研究』vol.22，2017年
「貧困と若年女性のライフコース—その『選択』の現実」松本伊智朗編『「子どもの貧困」を問いなおす—家族・ジェンダーの視点から』法律文化社，2017年
「貧困と子どもの経験—子どもの視点から考える」松本伊智朗編集代表『遊び・育ち・経験—子どもの世界を守る（シリーズ子どもの貧困②）』（共著）明石書店，2019年
- ③いよいよ日本でも量的調査の知見が蓄積されつつありますが，どのような調査内容を蓄積すべきか，本書がその議論のひとつになればと思います。そして，量的調査と相補的な質的研究の蓄積が切に望まれるところです。

加藤弘通 (かとう ひろみち)

- ①北海道大学大学院教育学研究院（発達心理学）
- ②『教育問題の心理学—何のための研究か？』（共編著）福村出版，2022年
『心理学概論—歴史・基礎・応用』（共編著）ミネルヴァ書房，2020年
『子どもの発達が気になったら はじめに読む発達心理・発達相談の本』（共著）ナツメ社，2019年
- ③貧困は「心の問題」を引き起こしますが，貧困を「心の問題」に還元してはならないことも強く感じます。心理学者が貧困問題を扱うリスクを感じつつ，しかし，言うべきことは何かを考え，本書の一章を書きました。

大谷和夫（おおたに かずひろ）

①北海道大学大学院教育学研究院（教育心理学）

②「動機づけ—動機づけ研究の教育実践への応用」藤原和政・谷口弘一編著『学校現場で役立つ教育心理学—教師をめざす人のために』北大路書房，2021年

“Parental perception matters: Reciprocal relations between adolescents’ depressive symptoms and parental perceptions”（共著）*Journal of Counseling Psychology*, Advanced online publication, 2022

“Parental motivational perseverance predicts adolescents’ depressive symptoms: An intergenerational analysis with actor-partner interdependence model”（共著）*Journal of Youth and Adolescence*, 49(1), 2020

③この調査をきっかけに子どもの貧困に興味をもちました。実際，学校での子ども達の様子を見たり，先生方の話を聞いたりすると，子どもの学びには家庭の置かれた状況が少なからず反映していることに改めて気づかされます。

上山浩次郎（うえやま こうじろう）

①北海道大学大学院教育学研究院（教育社会学）

②「教育機会の地域間格差と地域移動」中村高康・三輪哲・石田浩編『少子高齢社会の階層構造 1 人生初期の階層構造』東京大学出版会，2021年

「教育機会の不平等における地域と社会階層の関連構造—高等教育進学に注目して」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』138号，2021年

「北海道内の高等教育機会の地域間格差」『教育学の研究と実践』15号，2020年

③教育と社会的不平等の関連に興味関心があります。元々は，高等教育進学の世界格差の研究をしていました。最近では，地域格差にとどまらず，経済格差なども含めた多様な格差の相互関連のあり方を把握していきたいと考えています。